

青年海外協力隊マレーシア会

会報 第6号

発行 2014.7.1

マレーシアの民族の証である、マレーシアごはん

ライター&マレーシアごはんの会代表
古川 音

2005～09年の4年間、首都クアラルンプールで暮らしました。おいしいマレーシア料理のおかげで、毎日が楽しかった。帰国後、ナシゴレンやチャクイテオが恋しくなり、都内のマレーシアレストランに行ってみると、そこでもおいしいマレーシア料理がちゃんと味わえることを発見！それもマレーシア人のシェフが、マレーシアのゆる～い感じでもてなしてくれたのです。この出会いから、2011年「マレーシアごはんの会」の立ち上げを決意。マレーシアの料理を通してマレーシアを知ってもらう活動をスタートさせました。おもに活動内容は3つで、本格マレーシア料理を楽しむ食事会、料理教室、マレーシアでのごはんツアー。日本にいながらマレーシアの空気感を味わってもらうことをモットーにしているので、ハリラヤにはビーフレンダン、中国正月にはイーサンなど、マレーシアの行事に合わせた特別料理をレストランに提供してもらっています。先日は屋外でマレーシアン BBQ を開催。マレーシア人、日本人、中国人など120人を超える参加者で、サテやイカンバカルを炭火焼きにして楽しみました。

マレーシアごはんって本当においしいですね。うんうん、とうなずいてくれる先輩方も多いと思います。なぜマレーシアごはんがおいしいのか。普段は互いの食文化を行き来しているマレーシア人。でも、結婚式や行事などのハレの日には、かならず生まれ育った民族の料理でお祝いをします。たとえば冬至には団子、ハリラヤにはレマン、ナブラトリにはミルクのおやつ。私には、彼らが食を通して仲間との絆を深め、じぶんのルーツである祖先とのつながり確かめているように見えました。だから一緒に食事をしていると、彼らの文化や生き方に触れているような気持ちになった。彼らの祖先が切り開き、今も人々が歩み続けている道に、ひとときお邪魔させてもらっているような感覚です。マレーシアのごはんがおいしいのは、マレーシアで暮らす民族の証だからなのです。

さて、マレーシアごはんの会の活動を始めて色んな発見がありました。「中国系マレーシア人の中では、産後の女性に生まれたばかりのネズミを食べさせる習慣がある」というようなマジか?!と思うエピソードを教えてもらったり、「亡くなったお母さんが天国で見ているから、料理には絶対に手を抜かない」というマレーシア人シェフの言葉にじんとしたり。でもいちばん驚いたのは、マレーシア料理を食べていると、マレーシアにいたころの自分が鮮やかによみがえってきたことです。あとき、あの場所に、私はたしかにいたんだと。その感覚が今の活動のエネルギーになっています。食べるという行為は、命につながっています。だからごはんの記憶は、明日を生きるつながるエネルギーになるんですね。これからも、大事に育まれたマレーシアごはんを人々の記憶に刻み、明日を生きるエネルギーに変えていきたいです。

写真上：2014年5月16日新木場公園でマレーシアン BBQ を開催

写真下：民族衣装を身につけたマレーシアごはんの会事務局メンバー



サバの 9 日間

一般社団法人協力隊を育てる会
事業部長 伊藤聡一郎

昨年の 9 月、当会では（独）環境再生保全機構が主催する海外派遣研修事業の一つとして、途上国での環境保全活動を志す大学生、大学院生、NPO 職員など 10 名の青年男女とともにサバはコタキナバルを訪問、9 日間にわたる研修を実施しました。

本事業は、国際環境協力に特化した人材育成を目的としており、平成 9 年から現在まで東南アジアを中心に毎年実施されています。平成 25 年度の実施に際しては、国際協力活動のパイオニアとして途上国の環境問題にいち早く取り組んできた青年海外協力隊ならではの様々な経験やノウハウを応用した研修を当会が企画提案、本事業の運営実施を担うこととなりました。

本事業の企画提案をはじめ、事前事後の研修や講師の手配、研修生が立案するアクションプラン指導など、総合コーディネーターとして中心的な役割を担ってくださったのが、マレーシア OB であり JICA 青年海外協力隊事務局アジア・大洋州課特任参事（当時）の松永龍児先生、そして環境問題の専門家でありマレーシア OB 会会長である白山肇先生です。特に、白山先生からは企画提案の「5W1H」について多くのアドバイスをいただき、当会では「都市型環境問題を抱える途上国の縮図」とも言えるコタキナバルを研修地として、以下のプログラムと研修目標を定めました。

【プログラム内容】

- 1) サバ州コタキナバルを中心に、経済発展と環境保全が相反する現実を知る
- 2) 海、川、山、里、生活する人々の文化という一連の繋がりを体感し、環境保全の意味や効果を学ぶ
- 3) 地域住民との関わりを通じて「草の根」環境保全活動の実態を知り、課題に対して提言を行う



クリアス泥炭湿地センターにて植生・動物観察

【最終目標】

草の根無償資金協力への申請を視野に入れ、個人・グループによる環境保全活動のアクションプランを立案する

しかし、これらを実践するにあたって 9 日間という時間は非常に短いものでした。コタキナバル市内の JICA・SDBEC、ウェットランドセンターを皮切りに、クロッカー山脈公園、ウルセナガン村、クリアス川、マヌカン島、は



サバ大学学生と合同でマングローブ植林

たまたサバ大学学生との植林など、全体で 14 ヶ所のサイト訪問とアクティビティというスケジュールです。研修生は、長時間の移動と視察先での英語による意見交換、毎晩の「振り返り」や夜中までのアクションプラン立案に加え、最終日の現地報告会に向けて三日三晩徹夜に近い状況でプレゼンテーションの準備に取り組むこととなりました。また、主催者側より「形ある成果」を求められたことも研修生にとって大きなプレッシャーとなり、彼らにとっては、まさに疲労困憊の 9 日間だったと思います。

事故や病気といった事態もなく、何とか無事に研修を終えた帰りのフライト。眼下の限を濃くした研修生に感想を聞いたところ、異口同音に「同じ機会があったとしても次回は参加しない」「9 日間で成果を出すのは無理」とのコメントでした。研修に「成果」が求められるのは当然ですが、人材育成において「形ある成果」を短期間で産み出すことは並大抵のことではありません。同行した小職としては、目に見えない経験こそ「成果」だと思いつつ「厳しかっ

たけれど色々学べてよかった」といったコメントを期待していただけに、誰一人口をきかず、食事もそこそこ貪るように眠りにつく研修生の姿を横目に、反省しきりの眠れないフライトとなりました。

帰国してから 1 ヶ月後、研修を総括する報告会を開催し、研修生個人とグループによるアクションプランを発表してもらいました。日常生活でも始められるプランを帰国後から実践している研修生がいる反面、時間の経過とともに机上の学説を駆使して実現不可能に近いプランを作り上げてしまい、せっかくの経験が活かせていない研修生もいました。しかし、報告会終了後に研修生に再度感想を聞いたところ、「一生に一度の充実した 9 日間」「二度と得られない貴重な経験」と嬉しいコメントが相次ぎ、全員が「もう一度サバに行きたい」「サバとの関係を続けていきたい」との反応でした。時間を置いたことにより自身の中で冷静に振り返れるようになったからでしょうか、サバでの過酷な 9 日間が単に苦しい思い出ではなく、研修生の琴線に触れる「何か」に変化したことは、非常に嬉しい「成果」となりました。

特に冥利に尽きたことは、2 人の青年海外協力隊員の活動が研修生に強い影響を与えたことです。隊員の 1 人は、クロッカー山脈公園内で生活する先住民と行政による自然資源管理の確執の中で、環境保全に努めながら住民の伝統文化を尊重した現金収入の新たな道を作り出していました。もう 1 人は、「竹炭」を使って工業・生活排水によって汚染されたモヨグ川を浄化させる企画を、実施直前になって行政側の意向で止められてしまい目標を見失って苦しんでいる矢先でした。苦難を乗り越え到達点に近づいているケースと、大きな壁にぶつかり先が見えなくなってしまったケース。簡単な一言で表されるものではありませんが、途上国での活動の現実を自身と同世代の隊員を通じて目の当たりに出来たことは、これから国際環境協力の分野を志す研修生にとって「活きた」研修になったのではないかと思います。



クロッカー山脈公園内にて
先住民のゴム樹脂採取を見学

今、先日の JICA ボランティア春募集に研修生の中から応募者が出たこと、現地で知り合った NGO スタッフやサバ大学学生と研修生が Facebook で繋がっていることなどを風の便りに聞いています。この研修事業を通じて、当会としては人材育成の難しさや課題など、多くのことを学ばせていただきました。当初目標としていた、草の根無償資金協力の申請に至るような「形ある成果」には及びませんでしたが、サバを想う日本の青年男女が増えたこと、そしてこの研修を通じて次世代の青年海外協力隊員が生まれつつあることが、「成果」としてご報告できるのではないかと思います。そして、今は小さくともいつか大きくなる「成果」になることを願ってやみません。

本研修事業を実施するにあたり、白山肇先生、松永龍児先生、永江勉先生、そして帰国後もサバの環境問題に取り組もうとしている佐瀬耕二郎 OB をはじめ、活動中の隊員、多くのマレーシア OB、JICA ならびに青年海外協力隊事務局の皆さまにご支援ご協力を賜りましたこと、この場をお借りしてあらためて御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

そして私も「もう一度サバに行きたい」！

本研修事業の実施報告は以下の Web サイトにて公開中です。
ぜひご覧ください。

(独) 環境再生保全機構 海外派遣研修・短期

<http://www.erca.go.jp/jfge/training/h25/haken.html>



コタキナバル湿地センター (KKWC) でマングローブの生態を学ぶ

あれから 30 年

石井範子 (58-1、幼稚園教諭)

青年海外協力隊 FELDA TADIKA 隊員としてマレーシアの地を踏んだのは 1983 年 7 月 25 日でした。数日間 KL で研修後、任地から迎えに来たランドローバーにゆられ、Pahang 州 Triang に近い任地 FELDA



Kumai に向かいました。KL から約 3 時間、公道から赤土の道になり山がどんどん近くなり、それとともに日が暮れて、日没前、やっと任地に到着しました。今でも、鮮明に思い出す景色です。あれから 30 年が過ぎ、ウエーブ上で任地クマイの写真を見ました。建物も木からコンクリート、オイルパームの木は鬱葱と茂り、舗装された道、電線、鉄塔が立ち 30 年の歳月を物語っています。

任地の幼稚園も今は KEMAS によって運営されているようです。国旗掲揚ポールは 30 年前の物です。カウンターパート、幼稚園の先生達はどのようにしているのでしょうか。幼稚園児は親になって、「ごみはごみ箱へ」と自分の子供達に言っているのでしょうか？

今も自分の活動を思い出すと穴があれば入りたくなります。私のようなだめだめ隊員がなんとか任期を全うできたのも先輩隊員、平澤所長、八林所長、堀内調整員、鈴木調整員のおかげです。そして、帰国後も協力隊事業にどっぷりつかってしまったのもこんな隊員をあたたく見守ってくれた所長さん、調整員さんがいたからです。



マレーシアから帰国し 27 年、今、私は青年海外協力協会（JOCA）中部支部で勤務しております。協力隊参加で地元を離れてから 20 年ぶりに地元に帰り 6 年が過ぎました。地元に帰り、協力隊が意外に知られていないことを実感しています。愛知県は国際協力より多文化共生、外務省より産業労働省、JICA よりトヨタといった雰囲気です。



業務で東海北陸の OB 会に関わることが多々あります。OB 会がどうしてもっと活性化されるか、新しい帰国隊員が OB 会に関わるかを各県 OB 会のみなさんと考えることが多くなりました。とはいうものの、マレーシア会では活動らしい活動もしておらず、文章を書くのは不得意ですが、せめてものマレーシア会の活動と思い、寄稿させていただきました。

マレーシアのことを思い出していたら、無性にマレーシアに帰りたいくなりました。来年こそは娘とともにマレーシア FELDA KUMAI に里帰りをします。マレーシア在住の OBOG の皆様、その際はどうかよろしくお願ひします。

ヨルダンで再びボランティア三昧です 守永大策（H22-2、消費者製品検査）

定年退職後に初めて海外長期滞在となったマレーシアでのボランティア生活は、文化の違いに戸惑うこともほとんどなく、楽しいことが盛り沢山の 2 年間として幕を閉じました。普通であれば茨城で第 2(第 3?)の人生スタートとなるのですが、海外大好きな血が騒ぎ出して収拾がつかなくなり、再度 JICA ボランティアに応募したのは、帰国後ひと月もしない 2012 年 10 月のことでした。私のスキルに合った職種がマレーシア案件になかったことや浮気っぽい(?)性格の為に、ボランティア 2 回目の国はマレーシアではありません(ゴメンなさい)。同じムスリムの国ですが、マレーシアから遠く離れた中東の国ヨルダンが今回の活動先です。首都アンマンにあるヨルダン大学で『省エネルギー』に関係する講義を行ったり、工場のエネルギー効率向上などについての助言や指導を行うのがミッションとなっています。前回は 1 週間のマレー語訓練しかなくマレー語をほとんど話せませんでしたが、今回は日本で約 2 ヶ月、ヨルダンでもひと月間(1 枚目の写真です)と、充実したアラビア語の訓練を受けることができました。



(2013.11.13 : 語学学校で__先生 2 名と 25-2 同期 5 名と一緒に。)

おかげで、片言ではありますがアラビア語で会話したり、あの変なアラビア文字についても多少読めるようになりました。

ヨルダン生活も 8 か月目に入り、同じムスリムの国でありながら、マレーシアと違う点が多々あることにも気づきました。例えば、こちらでは陽気な人が多く、外国人が珍しいのか、面識がなくても平気で声をかけてきます。そのうち 7 割程度の人が無言でオオと言ってくるのは困ったものですが、在留邦人わ

ずか 300 人、中国の安い製品が幅を利かすヨルダンでは仕方のないことかもしれません。好意的な人が多いのですが、まれに物を投げてくる嫉妬の悪い子もいて、不快な思いをすることがあります。アジア人蔑視から起きる行動と言う人もいますが、本人に確認できていない為、定かではありません。

それにつけても、マレーシアはジェントルマンとジェントルウーマンの国でしたね。

ところで、ヨルダンには古代都市の遺跡が至る所にあり、首都アンマンでもローマ帝国時代の遺跡を見ることができます。2 枚目の写真は、昨年 10 月赴任直後に行ったアンマン市内の丘の上にある神殿の跡地です。3 枚目の写真は、ボランティア活動の合間を縫って最近訪問した世界遺産の古代都市ペトラで撮ったものです。皆様も時間と懐具合に余裕がありましたら、ぜひ一度訪れてみて下さい。いいところですよ。それでは、このあたりで、مع السلامة。

(これはアラビア文字で、マアッサラーマと読みます。"さようなら"という意味です。)



(2013.10.4 : アンマン市内の古代都市遺跡にて)



(2014.4.21 : 映画「デヴィッド・ジョーンズ」の舞台となったペトラにて)

サバの三人娘、1/3 は今

志賀典子(55-1、幼稚園教諭)

学生時代に学んだ“乳幼児発達”に興味を持ち、短大の保育科を卒業したあと、東京の麻布乳児院に就職をしました。その建物のすぐ後ろにあったのが、青年海外協力隊の広尾事務局および訓練所で、これが協力隊と私の出会いでした。当時幼稚園教諭の要請はなく、やっと55年に募集が出ました。派遣先は東マレーシア、サバ州ケニンガウ



サバの三人娘

という内陸の町で、ここに二人の幼稚園教諭と共に配置されました。出発の際に事務局の方々から送られた言葉は“とにかく三人で仲良くやって下さい。”でした。その心配の甲斐なく私たちはサバの三人娘として人気を博しました？ 任期中はプロジェクトの頓挫で失業の危機にも遭遇しましたが、コタキナバルに移って州政府の幼児教育事業に携わることが出来、任期を延長して三年後無事帰国しました。任期延長のおまけで、



ケニンガウの幼稚園の子どもたち

カナダから来ていたボランティアと知り合い意気投合して帰国後に結婚しました。その後カナダの北西海岸近くの町テラスに住んで、はや28年が経とうとしています。インド系カナダ人の相方は、北米先住民族ニスカ自治州の小学校で20年教員をしました。世界中の先住民族と共通して、ニスカ族も白人開拓者に独自の文化、先祖代々の土地、そして人権までも奪われて、今でも多くの人はアルコールやドラッグ依存の問題を抱えています。しかし誇り高い伝統文化を次世代に伝えようという活動は小学校でも取り組まれ、毎日ニスカの文化、言語の授業があります。私は子育てが終わってから、ここに

る乳児保育園で職を得ました。日本での幼児教育の資格はカナダで80%認められ、ここのコミュニティカレッジで2科目受講しただけでカナダでの保育士としての資格が取れました。この保育園は20年前に非営利団体として発足し、目的は子供のいる高校生の支援です。彼女達(先住民族の比率は非常に高い)が授業を受けている間その子供達を保育し、また母親としての自覚、子育ての知識を彼女達が持つよう支援するというものです。これにより彼女達の高校卒業率は見事に上昇しています。Think globally, act locally”という言葉があります。私が協力隊に参加して感じたことと共通する考え方で、地球的視野に立ち、今住む地で地域に奉



テラスにて子どもたちと朝の散歩

仕しようというものです。そういうことを思いながら、サバの三人娘の1/3は還暦を迎えようとしています。

会員
募集中！

協力隊を育てる会の「サポート会員」

協力隊を育てる会は、加入者が福利厚生サービスを利用できる「サポート会員」という会員制度を設けています。詳細は協力隊を育てる会のホームページをご参照下さい。

http://www.sojocv.or.jp/mbr_support/support/index.html

マレーシア会は6月より、その「サポート会員」に団体会員(10名以上の加入者がある団体)として認められました。個人会員ですと年会費3000円ですが、マレーシア会の方は団体会員の年会費1000円で加入頂けます。

【お問合せ】協力隊を育てる会

サポート事業部 担当；坂部、大石

TEL:03-6265-3982 E-mail:main@sojocv.or.jp

2015 年青年海外協力隊 50 周年

— 第三回総会（50 周年記念総会）

K. L. 開催計画案—

青年海外協力隊は 1965 年 4 月 20 日にスタートし、来年 2015 年に半世紀となる 50 周年を迎えようとしています。

マレーシアには発足年度の 1966 年 1 月 15 日に 5 名の方が赴任されています。記念すべき第一陣は、ラオスに 1965 年 12 月 24 日に 5 名が出発し、続いてカンボジア 4 名、マレーシア 5 名、フィリピン 12 名、ケニア 3 名となっています。

このように、マレーシアは発足の年より 50 年間、継続して隊員が派遣されている数少ない派遣国の一つで、帰国隊員も現在 1,200 余名になっています。青年海外協力隊事務局では、50 周年を祝う記念式典を来年秋に予定（正式な日程は未定です）していますが、それに合わせて、各県の OB・OG 会や国別・職種別の OB・OG 会での企画や催し等も期待されています。

さて、マレーシア会次回総会ですが、協力隊 50 周年の年と重なることもあり、クアラルンプールでの開催をとの案が出ています。JICA K.L.事務所で記念イベントが開かれるようであれば、それに合わせることも一案でしょう。また年一回の隊員総会（通常 10 月末）に合わせて、現隊員との交流を図るのもいいかもしれません。地方やブロックでの取り組みも考えられることと思います。

つきましては、マレーシアでの総会開催案に関しまして、賛否、実施時期、場所、内容等、ぜひ皆様のご要望やご意見をお聞かせください。合わせまして、参加の意向をお聞かせ頂けますなら、おおよその人数を把握するうえでも参考となります。

皆さまのご意見ご要望をもとに、今年末までには次回総会の実施概要をまとめ、皆さまに提示したいと考えております。

ご協力の程、宜しくお願いします。

【連絡先】マレーシア会事務局

右記、住所・電話・メール宛、要望お待ちしております。

協力隊の日を祝う会 参加

4 月 20 日、広尾の旧 JICA 地球ひろば（旧協力隊事務局）で JOCA 主催で協力隊の日を祝う会が開催され、関係者や O V 約 60 名が参加しました。当マレーシア会からも副会長 2 名、事務局が参加しました。



募集！

- ・会報への原稿は常時募集しています。皆さんの原稿をお待ちしています。
- ・会運営にかかわってくださる方、いつでも歓迎です。部分的な参加（会報・サイト・メール管理、グローバルフェスタなど）でもかまいませんよ。

寄付のお願い

活動費として、寄付は随時受け付けています。よろしくお願いいたします。

振り込み先：

郵便局記号：10140 番号 51611341

（郵便局外から振り込みの場合：店番 018、普通口座 5161134 です）

口座名義人：青年海外協力隊マレーシア会

代表 白山 肇

マレーシア会は国際協力サロン内に事務局を置きます。なお、この会報は青年海外協力隊マレーシア会会員と 2010 年の青年海外協力隊 OB/OG 会出席者に E メールもしくは郵送の形でお送りしています。配信を希望されない方はご連絡ください。また、会員は現在 470 余名ですが、まだ、会員登録されていない方には、是非マレーシア会のことお知らせください。

発行 青年海外協力隊マレーシア会 会長 白山肇
162-8433 東京都新宿区市ヶ谷本村町 10-5

JICA 地球ひろば メールボックス 51

TEL：090-7186-1065（国際協力サロン）

MAIL：malaysia@ics-together.com



世界自然遺産キナバル公園に咲くラフレシア
(マレーシア／サバ州 2013年9月 白山撮影)